

アニメの心内吐露表現における時代的变化

——『サザエさん』の「独り言」と「心内語」について——

高 橋 愛 子

1. はじめに

アニメは今や世界に誇る日本の文化と言われている。アニメの質を考える上で重要になるのが、アニメにおいて登場人物の思考や感情はどう表されているのか、という手法上の問題である。これはアニメでの一種の文体の問題と言える。昭和21年に発表された漫画版『サザエさん』では独り言はあるものの、心内語とみられる台詞はなく、登場人物の顔の横に示された「？」や「！」といったマークが心内吐露の補助的役割を担っている。舞台演劇においてはギリシャ劇の時代から、心内吐露は主に独り言の手法で表されている。心内吐露表現はそれぞれの媒体による表し方があり、時代とともに変化しているものと推測される。本稿では、アニメにおける心内吐露表現にどのような時代的变化が見られるのかを考察する。

アニメにおいて、心内語は登場人物が心の中で思ったことを表す際に出現する。登場人物の口は閉じているが、登場人物の声のナレーションによって「心の声」が表される。それにより、視聴者だけが「心の声」を聞くことができる。独り言と心内語は共に心内吐露表現であると考えるとき、アニメでは独り言と心内語の出現にはどのような違いがあるのか、また登場人物によつての違いがあるのかを、文体論的分析によつて導き出された数値から考察を行う。

本稿では『サザエさん』を分析対象とした。理由は、①日常を描いた物語であるため、分析結果が実際の独り言や心内語から大きく外れないものと考えられること、②1969年から50年以上続く長寿アニメであるために時代的考察が可能であること、③物語に連続性は無く1話ごとに完結していること、④主要な登場人物が長年変化していないこと、等が挙げられる。

アニメ『サザエさん』の放送開始時である1969年、そして2022年の放送回で出現する独り言と心内語にどのような変化が見られるのか、さらに独り言と心内語がアニメ作品にとつてどのように作用しているのかを明らかにする。

2. 先行研究

アニメについての言語的考察を行う先行研究は管見の限り、ほとんど見られない。しかし、本稿の考察に関連する先行研究として、次のような二つの観点のものが指摘できる。

2-1. 「独り言」

独り言⁽¹⁾や心内語とはどのような言語的性質のものなのか。独り言についての先行研究から、独り言の条件を確認する。独り言の言語的条件をまとめるにあたり、森山（1997）、廣瀬（2016）、長谷川（2017）を参考にした。

まず、独り言の条件は「聞き手の存在を前提とする表現」が含まれていないことが指標となる。森山（1997）、そして廣瀬（2016）長谷川（2017）において、「聞き手目当ての表現」（森山 1997）「聞き手志向表現」（廣瀬2017）として、以下の項目を挙げている。

【表1 「独り言」にならない条件】

	廣瀬	長谷川	森山
①終助詞	「よ」「ね」など	「よ」「ぜ」など	「ぞ」「わ」「さ」「なあ」を除く。
②丁寧語	「です」「ます」など	「です」「ます」	「聞き手目当て」
③命令・依頼表現	○	○	△「雨よ降れ！」などは独り言になり得る。
④応答表現	○「はい」「いいえ」	○	「聞き手目当て」
⑤呼びかけ	○	○	「聞き手目当て」
⑥伝聞	○「～だそうだ。」	○	○

【表2 「独り言」になる条件】

	廣瀬	長谷川	森山
⑦思考の展開	×	×	○
⑧確定意志でない	×	×	○
⑨思考動詞「スル系」不可	△	×	○「思う」「考える」等不可

なお、①終助詞に関して、長谷川（2017）は終助詞「ね」について長谷川自ら行った調査に基づき、「独り言での頻度は対話での頻度に匹敵して非常に多い」という見解により、「独り言」にならない条件から終助詞「ね」を外している。また森山（1997）は「ぞ」「わ」「さ」「なあ」について「独り言としての解釈に傾ける文末表現」であるとして「独り言」にならない条件から外している。

森山（1997）は「終助詞や丁寧形式などの聞き手目当ての形式がある文は独り言では言えない」として、③命令・依頼表現、④応答表現、⑤呼びかけ、は明記していない。しかし③命令・依頼表現、④応答表現、⑤呼びかけ、に関しては、聞き手がいないと成立しない言語表現であることは明らかであるため、筆者の判断で森山の項目に「聞き手目当て」として表に記した。なお、③の「命令」の文体には森山だけが例外があることを示している。一方で森山は「独り言」として

成立する内容については、〈思考の展開が表されている（自明ではない。）〉〈確定意志ではない。〉〈文末の思考動詞「～スル」系「思う」「考える」等は使えない。〉という条件があることを述べている。

本稿では、先行研究から導き出された独り言の言語的条件を基に、独り言であるか否かの判断を行う。また、こうした独り言の言語的条件が心内語にもあてはまるのかについても着目する。

2-2. シナリオ制作の観点による「独り言」

新井（1985）は、独り言は「観客に伝えるだけの使命を持っているに過ぎず」「シェイクスピア、モリエール初期の現代劇で盛んに使われていたが、現在では余り説明があざとすぎるので使われておりません」と述べている（pp.97-98）。また、新井は「セリフの進化課程」について、独り言は「受胎当時の一細胞的であるといってよく、セリフとしても、用件を語るのに急で全くの説明」であると述べた上で、「セリフの進化」の最終地点は「情緒あるセリフ」であるとした。「情緒あるセリフ」には「リズムとテンポにのった、伸縮自在のセリフのやりとり」があり、「観客は、まるで音楽を何回でも聴くように、テンポとリズムと、そして美しい律動感を楽しむ」ものだと説明する（pp.97-104）。また藤田（2018）においても「心情や感情を語りすぎている」ような説明台詞は悪い台詞であるという見解から、説明台詞になりがちな独り言の扱いに注意を示している（pp.86-87）。

本稿では、1969年と2022年の『サザエさん』の独り言と心内語についてアニメのシナリオという観点からも、どのような時代的变化が現れているのかを見ていく。

3. 研究方法

3-1. 研究対象

研究対象として取り上げるアニメ『サザエさん』は、同作品名『サザエさん』として1946年から1974年まで夕刊フクニチ、新夕刊、朝日新聞などで連載された4コマ漫画が原作である。新聞連載漫画という性格上からか、漫画では当時の政治、経済、文化など時事的話題も多く、社会風刺ネタも含まれる。主人公であるフグ田サザエを中心に、「家族」を軸とした内容構成は漫画に引き続いてアニメでも変わっていない。サザエ一家の家族構成は、父・磯野波平（54歳）、母・磯野フネ（52歳）、長女・フグ田サザエ（24歳）、長男・磯野カツオ（11歳）、次女・磯野ワカメ（9歳）、長女婿・フグ田マスオ（28歳）、フグ田タラオ（3歳）という二世帯家族で、一つ屋根の下で暮らしているという設定である。

テレビアニメとしては、フジテレビ系列の放送で1969年（昭和44年）から放送を継続し、世界最長記録を保持している。

本稿の分析対象として、『サザエさん』の昭和44年放送第1回目から10回目までの放送分を「昭

和期」、令和4年5月8日から7月10日までの10回分を「令和期」として分析を行った。昭和期においてはフジテレビ公式動画配信サービスFOD、令和期においては今年5月～7月のフジテレビ系列によるアニメ放送の視聴によって調査している。【表3】に今回調査した放送回を挙げる。なお、1回の放送に約7分間の作品が3話収録されている。10回の放送分でそれぞれ30話分が分析対象となる。

【表3 本稿で調査した放送回】

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
昭和期（昭和44年）	10月5日	10月12日	10月19日	10月26日	11月2日	11月9日	11月16日	11月23日	12月7日	12月14日
令和期（令和4年）	5月8日	5月15日	5月22日	5月29日	6月5日	6月12日	6月19日	6月26日	7月3日	7月10日

昭和期と令和期を分けたのは、家族をテーマの軸とした構成の変わらない長寿アニメが50年もの月日を経てどのような変化が起きているのかを調査するためである。アニメ『サザエさん』の昭和期と令和期を隔てる約50年の間には日本の社会にも少なからず変化がある。そうした社会的変化が日本の一家族を想定して描かれる『サザエさん』の言語表現の面においても何らかのかたちで表れている可能性がある。日本の社会的変化がアニメの描き方にどのように作用し、それが心内吐露表現にどのように表れているのかにも着目したい。

3-2. アニメの心内吐露表現の画面上の類型

まず、アニメの考察にあたって、独り言と心内語の分類基準を検討する。登場人物の発話においては、通常、画面に登場人物の顔が映り、口元がパクパクと開閉する動きに合わせて声が発せられる。アニメ制作業界では口元がパクパクと開閉する様を通称「パク」と呼んでいる。登場人物を演じる声優が「パク」の時間的尺に合わせて決められた台詞を基に演技をすることで、声が当てられる。

心内吐露表現を画面上で類別すると、以下の通りになる。

- ①顔が映り、口元のパクなし、口は閉じたまま登場人物の声がある時、心内語であることが確定。
- ②顔が映り、口元のパクなし、口が開いたまま登場人物の声がある時、心内語もしくは独り言。
- ③顔が映り、口元のパクに合わせて登場人物が話し、近くに対話相手がいない時、独り言であることが確定。
- ④顔が映り、口元のパクに合わせて登場人物が話し、近くに対話相手がいて、独り言の言語的条件を満たしている時、独り言のように聞こえる場合がある。
- ⑤顔が映っていないなど、口元が見えない場合、心内語か独り言であるかの判断が出来ない。独り言の言語的条件を満たしている時、独り言もしくは心内語である場合がある。

以上の①～⑤を図にすると次のようになる。

※登場人物の声がある場合を想定。

- 顔 → パクなし → 口閉じてる → ①心内語確定
 - ↳ 口開いたまま → ②心内語もしくは独り言
 - ↳ パクあり → 近くに対話相手がいない → ③独り言確定
 - ↳ 近くに対話相手がいる → ④言語的条件上は独り言
- 背 → ⑤心内語もしくは独り言の判別が不可能

画面に顔が映って声が聞こえることを前提として、パク（口元の開閉する動き）があるか無いかによって、独り言か心内語かの判断が分かれる。パクが無く、口が閉じているものを「心内語」と判断する。パクがあり、さらに本稿では近くに対話する相手がいないことを条件に「独り言」と判断した。

「背」とは、画面上に登場人物の背中や後頭部のみが映るなど、口元が見えていない絵のことをアニメ制作業界では「背」と呼ぶ。このような「背」の絵の場合、登場人物の声が心内語であるのか独り言であるのか判別が難しいため、本稿の調査対象から外した。以上の分類基準を踏まえて、アニメ『サザエさん』の考察を行う。

4. アニメ『サザエさん』の心内吐露表現

4-1. 『サザエさん』の心内吐露分類

アニメ『サザエさん』の心内吐露表現について、3-2. で述べた①～⑤の画面上の分類を昭和期と令和期で行うと以下の結果となった。なお、発話回数の数え方については、発話の長短に関わらず、一定のポーズ（およそ1秒以上）が空く前まで、もしくは別の話者の発話が始まる前までを1回と数えた。また下記③の「近くに対話相手がいない」という条件においては、近くに人がいても〈アニメ画面上で動きが静止しており、明らかに背景と化している人物〉や、〈寝ている人物〉の場合は対話相手とは認めないこととした。

【表4 アニメ『サザエさん』の心内吐露の分類】

画面上の分類	昭和期	令和期
①口閉じ／パクなし…心内語（確定）	20回	48回
②口開け／パクなし…心内語 or 独り言（判定不可）	23回	0回
③近くに対話相手ナシ・口開け／パクあり…独り言（確定）	188回	87回
④近くに対話相手アリ・口開け／パクあり…言語的条件上は独り言	83回	45回
⑤口元が見えない…心内語 or 独り言（判定不可）	20回	10回

「①（口閉じ／パクなし）心内語」は、登場人物の口は閉じたまま、登場人物の声が聞こえているため、心内語であることが明確である台詞のみを抽出した。「③（近くに対話相手がいない／パクあり）独り言」は、登場人物の口がパクパクと動いて言葉を発し、且つ、発話者の近くに対話相手がいないために独り言であることが明確である台詞のみを抽出した。本稿では「①（口閉じ／パクなし）心内語」と「③（近くに対話相手がいない／パクあり）独り言」を中心に考察を行う。本稿で「②口開け／パクなし心内吐露」「④近くに対話相手がいる独り言」「⑤口元が映っていないため判別不可能」を取り上げない理由は以下に詳しく述べる。

「②口開け／パクなし心内吐露」としたものは、画面上で口が開いたまま静止してパクの開閉が無い場合、独り言か心内語であるのかの判断がつかない台詞である。独り言の言語的条件があてはまっても、画面上で口元のパクが動いていないため、独り言か心内語であるかの判別は出来ない。それは2-1.で述べた「独り言」の言語的条件が「心内語」にも等しくあてはまることを意味している。また表4にあるように、アニメ『サザエさん』の昭和期に「②口開け／パクなしの心内吐露」が23回見られ、令和期には0回であった理由には、時代的な背景があると推測される。日本初のテレビ連続放送アニメである『鉄腕アトム』が放送開始したのが1963年であり、『サザエさん』の昭和期として考察を行った1969年は日本のアニメ業界においても発展途上の時期にあったと考えられる。そうした背景が独り言と心内語という心内吐露表現の使い分けにも曖昧性をもたらしたのではないだろうか。またアニメは何枚ものセル画が使用されて映像の動きが作られるが、『サザエさん』の昭和期（1969年）では、セル画作成の省略と考えられる場面が度々見受けられた（例えば、授業参観に訪れる父兄が校門に次々入っていく場面では、数組の父兄を描いた同じ絵が何度も使われている。（1969年12月7日放送回））。口元のパクの開閉にもセル画の枚数は加算されるため、独り言か心内語であるかの区別においてはあまり重視されていなかったとも考えられる。しかし、そのような曖昧性も令和期においては解消されている。

「④近くに対話相手がいる独り言」としたものは、近くに対話相手がいて会話の途中などでも言語的条件により独り言と判断できる発言を分類した。しかし、本稿では、この「④近くに対話相手がいる独り言」を独り言として取り上げないこととする。池上（2007）は「日本語の談話には、本来〈モノローグ〉を特徴づけるはずの原則に基づくと思われる振舞いが多かれ少なかれ入り込む傾向があり、しかもそれがかなり許容されうる」と述べている（p.276）。つまり、日本語による会話には、会話の途中にも言語的条件を満たした独り言が発話され得るということである。しかし、会話の途中での独り言は「間接発話行為」（オースティン）の観点からの考察も必要となる可能性がある。例えば、『サザエさん』では、波平とカツオとの会話の際に、波平から注意を受けたカツオが「そうだ！宿題忘れてた！」と、その場を立ち去る場面がある。「そうだ！宿題忘れてた！」は独り言の言語的条件を満たしているが、その場を逃げるための間接発話行為である可能性も高い。このような別の意図があると考えられる独り言は、独り言そのものの考察が

できない可能性があるため、本稿では対象から外すこととした。

「⑤口元が映っていないため判別不可能」としたものは、独り言の言語的条件を満たしていても、口元が映されていない画面であるために独り言か心内語かの判断が出来ない。因って、本稿では考察の対象から外した。

4-2. 昭和期と令和期の出現数

それでは、明らかに心内語と分かる場合と、独り言と分かる場合とでは、それぞれどのような使い分けがなされているのであろうか。4-1.において心内語もしくは独り言と確定しているもののみを対象に、『サザエさん』の昭和期と令和期の全出現回数を比較すると以下ようになる。

【表 5 昭和期と令和期 各30話中の全出現数】

	独り言	心内語
昭和期 (1969)	188回	20回
令和期 (2022)	87回	48回

昭和期から令和期を比較すると、独り言が半数以下の減少し、心内語が2倍以上に増加している。

さらに、1話あたりの発話数と比較するため、昭和期と令和期のそれぞれ10回分の放送のうち、前後2回分ずつの計4回の放送分を対象にサンプルデータを抽出した。1回放送につき3話収録されているので、それぞれ12話分の発話回数のサンプルデータとなる。独り言と心内語、そして発話数の1話あたりの平均出現数は以下ようになる。

【表 6 1話あたりの平均出現数】

	独り言	心内語	発話数
昭和期	6.26回	0.66回	94.5回
令和期	2.90回	1.60回	121.3回

令和期に比べて昭和期のほうが独り言が多いものの、平均発話数は少ないことが分かった。『サザエさん』の1話あたりの時間は放送開始から約7分間であることは変わっていないにも関わらず、平均発話数が昭和期「94.5回」で令和期「121.3回」ということは、令和期では昭和期に比べて発話数が約1.3倍に増加していることになる。さらに、独り言と心内語の数値も加味すると、昭和期に比べて令和期では「対話」が増えているということが分かる。

2-2. で述べた通り、シナリオ制作において、独り言は登場人物の心情説明が主な役割である。そして、シナリオには通常、テンポの良い対話が求められる。令和期において、独り言が減少し

て対話が増加したという結果は、つまりシナリオ作成の進化であることを示唆している。

さらに、新井（1985）は「独白の有名なのはシェイクスピアの名作『ハムレット』の名セリフ〈生きるべきか死すべきか、それが問題だ〉と言って悩みますが、観客に伝えるだけが目的のものです。」（p.97）と説明を加えているが、新井の説明で引用されたシェイクスピアの『ハムレット』の独り言はアレンジが加えられ、本稿で考察を行った『サザエさん』の昭和期にのみ30話のうちでも2度登場している。

1969年10月19日放送回「お医者さんの巻」（脚本：辻真先）サザエが電信柱にしがみついて歯医者に行くのを躊躇う場面。

サザエ（独り言）「行くべきか、やめるべきか、それが問題か…。」

1969年12月14日放送回「野次馬の巻」（脚本：小沢洋）サザエ一家の留守中に空き巣に入った泥棒が、かかってきた電話に出るか悩む場面。

泥棒（独り言）「出るべきか、出ざるべきか、これが問題だなあ…。」

上記のように、シェイクスピアの独り言のパロディーとして、1969年の昭和期『サザエさん』の独り言が表れている。しかし、依田（2014）は、伝統演劇に位置付けられるシェイクスピア演劇の独白は、19世紀後半に始まったリアリズム劇にはない「劇の約束事」の一つであるとしている。依田（2014）は「独白」について、以下のように述べている。

「独白」は、「心の思い」を無理に言語化して観客に聞かせるようにしたものであり、劇中世界に置かれながら、観客への方向性をも持つという性質をもっている。それは、人が日常世界で時として口に出す「独り言」ではない。（p.399）

依田は、伝統演劇の「独白」と日常にある「独り言」とを区別している。そして伝統演劇の独白は「一方で劇中世界で機能すると同時に、他方で観客へのインパクトのあるメッセージを伝える」という「演劇独特の約束事の一つ」と位置付ける。昭和期の『サザエさん』に見られたパロディー化した独り言は、劇中世界に置かれながらアニメ視聴者へインパクトを与える趣向を持つ台詞であるという点で、依田の述べた演劇的な独り言の方向性と一致する。独り言にシェイクスピアの名台詞のパロディーを示すことで視聴者に笑いを仕掛けている時点で「人が日常世界で時として口に出す『独り言』」とは性質が異なるからだ。

昭和期の『サザエさん』のこうした演劇的な表現は、他にもみられる。1969年11月9日放送の「訪問学入門」という回で、訪問客の特徴がサザエとフネの会話によって示されるのだが、後半になって突如カツオがいわゆるカメラ目線になり視聴者に向かって話し始める。

カツオ 「えー、その点、僕などは、どこへ行っても喜ばれる客なんです。では、その実例をひとつお目にかけましょうか。」（カツオが訪問して客に喜ばれる回想場面になり）

「ま、ざっと、こんなもんです！」

（回想場面から、風呂桶の蓋の上に座って話しているカツオの現実場面に戻る。

風呂の中からのぼせた波平とマスオが出てきて、この話の回は終わる。）

視聴者は、突然カツオの言葉が視聴者側へ向けられることに驚きを感じるだろう。依田の言葉を借りれば、演劇的な虚構の世界を破り、視聴者世界へ侵入するという、ひとつの手法であると言える。こうした手法は19世紀の西洋演劇において発生したと推定されている。このように、突如、舞台上の登場人物が観客に呼びかけることを「第四の壁を破る」という言葉で表される（プレヒト（1996））。通常、箱型の劇場では役者が演じる舞台上の一方面のみが客席に向かっている。その客席側の一方面を舞台上の「第四の壁」とすることから、このような言葉が生まれた。舞台と同じくアニメでも、テレビ画面を第四の壁と捉えて「第四の壁を破る」手法が、昭和期の『サザエさん』に使われているということである。調査対象とした昭和期30話のうちでは計5回この手法が用いられている⁽²⁾。なお、この「第四の壁を破る」という演劇的手法の台詞は視聴者に向けられた台詞であるため、本稿の「独り言」には含めない。しかし、昭和期で見られるこうした演劇的手法は令和期にはない表現であることから、昭和期（1969年）と令和期（2022年）において、シナリオの作り方に变化が生じているものと考えられる。

シナリオの構成の変化について、例えば、昭和期の1969年10月12日放送の「ちょっとひとこと多かった」と令和期の2022年7月10日放送の「誰かボクを止めて」は、共にカツオを主人公にした話であり、どちらもカツオが誰かに対して余計な一言を言うてしまうことが止められない、という内容である。昭和期「ちょっとひとこと多かった」では、カツオが学校で複数の先生に対して失言を繰り返していく構成になっている。令和期「誰かボクを止めて」では家に訪れた客にカツオが余計な一言を言うてしまう場面から始まり、最後は学校の場面で終わる。昭和期と令和期の学校での場面においては、教室で一人立たされたカツオが、遅くまで学校に残ることになった女の先生に「ご主人にお詫びを言っといってください」「だって共働きでしょ？ご主人だけに夕飯の支度をさせちゃ…」と余計な一言を言う場面が重複する内容となっている。〈カツオが余計な一言を言う〉という題材は同じでありながら、昭和期と令和期のシナリオの構成上で大きな違いとなるのは、令和期にのみサザエ一家の家族団らんの場面がある点である。波平が画面中央に座し、家族みんながちゃぶ台を囲み、会話をする。そこで、カツオが余計な一言を言うてしまうことに対し、波平が罰金を課して家族みんなでカツオを諭す場面となっている。昭和期と令和期で、サザエ一家がちゃぶ台を囲んだ家族団らんの場面がある話を数えてみると、昭和期では30話中4話、令和期では30話中25話であることが分かった。サザエ一家の団らんの場面の有無は、一話あたりの対話の量にも関わるはずである。こうしたシナリオの構成の違いが、全体の発話数と心内吐露の数に少なからず関係しているものと推測される。昭和期の「ちょっとひとこと多かった」では全発話数98回、独り言はカツオ10回、女の先生2回、心内語は男の先生1回であった。対し

て、令和期の「誰かボクを止めて」では全発話数110回、独り言はカツオ1回、ワカメ1回、心内語はカツオ1回であった。つまり、同じ趣旨の内容でも昭和期と令和期では構成に変化が生じており、そうした構成の変化が、全体の発話数と心内吐露の出現数に変化をもたらしていると言えるのではないだろうか。

4-3. 独り言と心内語 モーラ数の比較

では、独り言と心内語の1回あたりの長さに時代的变化はあるのだろうか。アニメ『サザエさん』の昭和期と令和期に出現する独り言と心内語について、モーラの数を集計した。例えば、「カツオめ、やったな!」という独り言を8拍と数える。独り言と心内語で、それぞれ総モーラ数を算出し、独り言と心内語の出現回数で割った数を出す。昭和期と令和期で独り言と心内語の1回ごとの平均モーラ数を導き出すことで、長さにも時代的变化があるのを明らかにすることができる。小数第二位以下は切り捨てとする。

昭和期の独り言の総モーラ数3549拍を独り言の総出現数188回を割ると18.8拍であった。次に、令和期の独り言の総モーラ数1959拍を独り言の総出現数87回で割ると19.0回であった。この結果から、独り言の平均拍数は昭和期と令和期であまり変化が見られないことが分かった。続いて、昭和期の心内語の総モーラ数314拍を心内語の総出現数20回で割ると15.7拍であった。令和期の心内語の総モーラ数1139拍を心内語の総出現数48回で割ると23.7拍であった。つまり、心内語においては、昭和期よりも令和期の方がモーラ数が8拍分多いことが分かった。したがって、独り言のモーラ数の平均値は昭和期、令和期とも大きな変化はみられなかったが、心内語においては昭和期よりも令和期の方が1回の心内語の平均値が8拍長いことが分かった。8拍長いことで心内語の発話内容にも変化がみられるものと考えられる。

4-4. 独り言と心内語 内容分類による比較

続いて、独り言と心内語の内容分類について分析を行う。心内吐露表現の内容を観察すると、「自問」と「判断、もしくは感想」に大きく二分されることが分かった。因って、独り言と心内語の内容分類を「自問」と「非自問」とで分けることとする。まず、「自問」の文型に関して、宮地（1980）の疑問表現を基に、聞き手の存在がある「疑問」と、聞き手の存在がない「自問」との違いを確認したい。

宮地（1980）による疑問表現の定義は、次の3つの条件の1つ以上を満たすことである。①文末に特定の助辞「か」を添える。②文中に疑問詞を用いる。③文末の音調を上げる。以上の3つの疑問表現の条件が自問表現にいくつあてはまるかを確認する。アニメ『サザエさん』の独り言と心内語から調査した結果、①文末の助辞「か」を添える、という条件は若干数みられる。しかし、その場合、「行くべきか、やめるべきか、それが問題か。（イントネーションは下降↓）」の

ように、文末の「か」は〈疑問〉ではなく〈話し手の判断保留〉であると考えられる。②文中に疑問詞を用いる、という条件は自問表現においてもあてはまった。例えば「さてと、どこに隠しようかな。」「きょうはどうしたんだろう。」「確かに誰かいたような気がしたんだけどなあ。」などである。③文末の音調を上げる、という条件は多くはないものの自問表現にも表れていた。しかし、例えば「五十嵐さんの家のお客さんだったの? (イントネーションは上昇↑)」のように聞き手の存在に向けた疑問ではなく、目の前の状況に対して自身で驚きつつ疑うような心内吐露の時に、文末の音調の上昇がみられた。以上の結果から、①文末の助辞「か」を添える、という条件と、③文末の音調を上げる、という条件は「自問」でも若干数見られるものの、聞き手の存在がある「疑問」で表れるものとは性質が異なるものであり、②文中に疑問詞を用いる、という条件のみ「自問」にあてはまることが分かった。一方で、「自問」特有の表現と考えられるものとして、「かしら」「かな」「だろう」「(本当は) ～かも」のような文末表現の他に、「いや待てよ」が文頭に来て、一旦立ち止まって自問自答を示す表現が確認できた。例えば「待てよ? これじゃバレルなあ。」のように、「これじゃバレルなあ。」のみでは「判断、もしくは感想」という「非自問」の分類であるが、独り言もしくは心内語の文頭に「待てよ?」が表れると自問の指標となり、自答となる判断が後に続くものと考えられる。対して、「非自問」の「判断、もしくは感想」の分類に当てはまるものとしては、「やれやれワカメもやっぱりサザエ姉さんの妹だなあ。」「空いとる! 乗ればよかったー。今日も思惑外れが続くなあ。」などのように、「自問」以外の心内吐露は、おおよそその場の状況からの判断や感想を述べる内容であることが分かった。それは森山(1997)が独り言の条件で述べた〈思考の展開〉に基づく内容であると推測される。

以下の表7において、「自問」と「非自問」を、さらに「一文以下」と「二文以上」とに分けて集計した。なお、一文の定義としては一語文や、主語もしくは述語等が省略された文も含むものとする。

【表7 内容分類による比較】

	昭和期〈独り言〉	令和期〈独り言〉	昭和期〈心内語〉	令和期〈心内語〉
非自問 1文以下	116回 (61.70%)	49回 (56.32%)	12回 (60.00%)	30回 (63.82%)
非自問 2文以上	49回 (26.06%)	21回 (24.13%)	3回 (15.00%)	6回 (12.76%)
自問 1文以下	13回 (6.91%)	12回 (13.79%)	4回 (20.00%)	6回 (12.76%)
自問 2文以上	3回 (1.59%)	0回 (0%)	0回 (0%)	3回 (6.38%)
自問+非自問	7回 (3.72%)	5回 (5.74%)	1回 (5.00%)	2回 (4.25%)
総出現回数	188回 (100%)	87回 (100%)	20回 (100%)	48回 (100%)

表7で示したのは、それぞれの出現回数を分母にして、出現比率を出したものである。まず、「非自問」と「自問」を「1文以下」と「2文以上」に分け、1回の発話に自問の文と非自問の文の

両方の内容を含む2文以上のもの、例えば「あれ、どこ？いないじゃない。変なマスオさん。」などを「自問+非自問」という項目にして集計を行った。その結果をそれぞれ時代別の独り言または心内語の出現回数を分母として、出現比率を導き出した。その結果、昭和期と令和期とも、独り言では「非自問 1文以下」が約6割で「非自問 2文以上」が約2.5割を占め、心内語では「非自問 1文以下」が約6割で「非自問 2文以上」が約1割強であった。「自問」の項目には若干違いが出ているものの、大きな差は出ていないものと思われる。つまり、内容、そして文単位の分量における割合は、昭和期と令和期で大きな変化がないことが分かった。

5. 独り言と心内語 使用比較

5-1. 心内語の状況分類

それでは、アニメで実際に独り言と心内語がどのように使い分けされているのかを考察する。まずは心内語が出現する状況と心内語の内容から分析を行った。その結果、心内語は3つの類型に分けることができる。①「対面遠慮型」心内語、②「周囲配慮型」心内語、③「独り思考型」心内語である。

①「対面遠慮型」心内語は、目の前にいる人に対して言えない思いを心内語として吐露したものである。例えば、目の前にいる人とのエピソードが事前にあった上で、または目の前にいる人との会話の最中に、発話者がその人に対して口にはしてはいけないと判断した内容を、心内語として表したものである。以下のような状況で出現する。

2022年6月19日放送回「父の日のゆくえ」より（脚本：諸橋隼人）。波平はカツオから自分へプレゼントを後日贈られることを事前のエピソードで知っているために、別件で怒らねばならない目の前のカツオに対して怒ることができないでいる。

波平（心内語）「まいったなあ。父の日のプレゼントを用意してくれていると思うと怒るに怒れんし。」

この「対面遠慮型」心内語は、発話時に対面している人と関わりのある内容が心内語に表れる。

②「周囲配慮型」心内語は、公共の場など、周りに人がいて声を出すべき状況ではない場での考え事を吐露する心内語である。

2022年6月26日放送回「波平、思惑ハズレ」より（脚本：浪江裕史）。満員電車のなかでの心内語。休日の朝、カツオと一緒に電車で釣りに出掛ける波平。

波平（心内語）「あのまま、うちのんびりしていれば良かったあ。」

「周囲配慮型」心内語は、電車やバスのなか、駅や街中など、公共の場で多く見られる心内語の類型である。作品の虚構性がリアリティの上で成り立つものであることにより、独り言ではなく心内語が用いられているものと推測される。ただし、②の「周囲配慮型」心内語は、例えば満員電車内で目の前にいる人に言えない内容を心内語として吐露するなどの状況も考えられるため、

①の「対面遠慮型」心内語とは連続性があると言える。

③「独り思考型」心内語とは、周りに人がいない場での考え事が心内語となったものである。

2022年7月3日放送回「七夕の願いごと」より（脚本：あみや まさはる）。強豪チームと野球で勝負することになったカツオ、一人で道を歩きながら考える場面。

カツオ（心内語）「みんなにもやる気になってもらうには、どうしたらいいかな…。」

「独り思考型」心内語は、周りに人がいない状況で表される心内語である。「対面遠慮型」のように目の前にいる人と関係する内容となる心内語とは異なり、その場で思い付いた内容がそのまま心内語として表される。

以上、状況と内容による類型として、①「対面遠慮型」心内語、②「周囲配慮型」心内語、③「独り思考型」心内語の3つに分類した。①「対面遠慮型」と②「周囲配慮型」は、目の前もしくは周囲に人がいて、独り言として心内吐露がしばらく状況の心内語である。一方で、③「独り思考型」心内語は、周りに人がいない状況での心内語である。

この①～③の類型に『サザエさん』の昭和期・計20回と、令和期・計48回の心内語を分類すると次のようになった。

【表8 昭和期と令和期 「心内語」全出現数からの分類】

心内語	昭和	令和
対面遠慮型	5回	18回
周囲配慮型	3回	23回
独り思考型	12回	7回

昭和期と令和期で心内語のタイプの割合が異なっている。昭和期では「独り思考型」心内語が割合として多く、令和期の心内語の多くは「対面遠慮型」もしくは「周囲配慮型」である。「独り思考型」は、独りでいるときに声に出さずに思考した内容を吐露する心内語であるが、アニメ『サザエさん』では周りに人がいない場合の心内吐露表現として「独り言」が多用されている。では、「独り思考型」心内語と「独り言」は、アニメ『サザエさん』でどのように使い分けられているのだろうか。

以下に示すのは令和期の『サザエさん』の「独り思考型」心内語と「独り言」の例である。どちらも波平が家までの帰り道に心内吐露をしている場面である。

2022年6月26日放送回「波平、思惑ハズレ」より（脚本：浪江裕史）。前日から何をするにも思惑通りにいかず、落胆する波平。家までの帰り道を歩いている場面。

波平（「独り思考型」心内語）「とことん思惑通りに行かんあ。」

2022年7月10日放送回「真夜中のごちそう」より（脚本：中園勇也）。「今日は飲まない」と宣

言しながらも、結局遅くまで部下と飲んでしまい反省する波平。家までの帰り道を歩いている場面。

波平（独り言）「ふー、結局、こんな時間になってしまった。母さん怒っとるだろうなー。」
上記の例は、いずれも波平が会社から一人で帰宅中に心内語もしくは独り言を表した場面である。このように、『サザエさん』では同じ登場人物による同じ帰り道の場面での心内吐露表現に、「独り思考型」心内語と独り言の両方が用いられている。内容もそれぞれ「非自問」の「判断、もしくは感想」に当てはまる。つまり、「独り思考型」心内語と独り言には明確な使い分けがされていないのではないだろうか。

「独り思考型」心内語と独り言についての明確な使い分けがされていないのは、作品上で大きな違いにはならないからであると推測される。しかし、心内語の「対面遠慮型」と「周囲配慮型」に関しては、リアリティーのある日常を描く上では、独り言ではなく心内語を用いる必要がある。「対面遠慮型」や「周囲配慮型」の心内語が独り言として表された場合、発話者の近距離にいる相手は独り言が聞こえないことが不自然に見えてしまい、リアリティーを欠くことになってしまうからだ。つまり、「対面遠慮型」心内語と「周囲配慮型」心内語はリアリティーが求められる作品に見られる類型と言えるだろう。

5-2. 心内語と作風との関連性

昭和期で「対面遠慮型」と「周囲配慮型」の心内語が少ないのは、『サザエさん』の昭和期の作風が令和期とは異なることが理由として考えられる。昭和期の『サザエさん』第一回目の放送では、波平宛のラブレターをフネが見つけて激怒し、フネがハサミを持って追っかけ回すシーンがある。フネが馬乗りになって波平の1本の頭髮を切ろうとする（昭和44年10月5日放送回）。また小学校の運動会ではスターターピストルが爆発してカツオが黒焦げになる。お腹の痛がるワカメを連れて行った病院の看板には「阿保精神病院」、サザエが行った美容院には「全ブス美容院」と書かれている。このように、放送開始当初の昭和期の『サザエさん』はギャグアニメ的作風であったと言える。ギャグアニメを定義付けるならば「非現実的事象による笑いに主眼を置いたアニメ」であり、令和期の『サザエさん』とは異なる作風であると考えられる。令和期において「対面遠慮型」心内語と「周囲配慮型」心内語が増加したのは、令和期がリアリティーのある作風へと変化しているからであり、そうした作風の変化が心内語の調査結果にも現れているものと考えられる。

6. 視点の分散性

『サザエさん』における心内吐露を登場人物の多様性という観点からも見ていく。

まずは、昭和期と令和期のそれぞれの放送回ごとに、心内吐露がどのような登場人物によってなされているのかを確認する。時代別に10回分の放送回を #1～#10で示し、1回の放送に収録

アニメの心内吐露表現における時代的变化

された3話を①～③で示した。

【表9 昭和期における登場人物別でみる心内吐露】

昭和期	独り言	心内語
#1①	カツオ4回・おば1回・ねずみ1回	サザエ1回・フネ1回
#1②	サザエ2回・押売り①2回・押売り②2回・カツオ1回	押売り②1回
#1③	波平5回・サザエ1回	波平1回
#2①	カツオ8回・先生①2回	先生②1回
#2②	柔道の先生2回・サザエ1回	(心内語なし)
#2③	ワカメ5回・波平4回・カツオ4回・マスオ3回・フネ2回・サザエ2回	(心内語なし)
#3①	サザエ4回・医者2回・看護師1回・ワカメ1回	(心内語なし)
#3②	カツオ2回・サザエ2回・ワカメ1回・友人1回	(心内語なし)
#3③	サザエ1回・マスオ1回・幹事1回	(心内語なし)
#4①	カツオ9回・波平1回	波平1回
#4②	ワカメ4回・サザエ3回	ワカメ1回
#4③	波平3回・サザエ3回・カツオ3回・フネ1回・マスオ1回	(心内語なし)
#5①	ワカメ7回・カツオ1回・フネ1回	ワカメ1回
#5②	サザエ2回・マスオ2回・カツオ2回	(心内語なし)
#5③	(独り言なし)	カツオ2回
#6①	サザエ1回・波平1回	ワカメ1回
#6②	カツオ1回・来客1回	(心内語なし)
#6③	(独り言なし)	(心内語なし)
#7①	カツオ1回・泥棒1回	(心内語なし)
#7②	サザエ4回・カツオ4回・波平2回・ワカメ1回	(心内語なし)
#7③	マスオ10回・カツオ8回・サザエ3回・ワカメ1回	マスオ3回・カツオ1回
#8①	カツオ2回	(心内語なし)
#8②	カツオ23回・マスオ1回	カツオ1回・マスオ1回
#8③	さゆり2回	さゆり1回・サザエ1回
#9①	(独り言なし)	(心内語なし)
#9②	(独り言なし)	(心内語なし)
#9③	カツオ2回・サザエ1回	(心内語なし)
#10①	泥棒3回・サザエ1回	(心内語なし)
#10②	(独り言なし)	(心内語なし)
#10③	フネ2回・泥棒1回	泥棒1回

上記の表9「#6③」の回のように独り言と心内語がどちらも出現していない回もいくつかあった。また心内吐露の発話者に統一性はないが、サザエ一家を描くアニメであることから、サザエ一家の特にカツオ、サザエ、ワカメの心内吐露が多く現れていた。また、以下に示す令和期の表と比べて分かることは、昭和期では「ねずみ」から「泥棒」まで、一度しか登場しない人物にも比較的多く心内吐露の場面があるという点である。一方、令和期ではサザエ一家のほかに心内吐露する登場人物として、#3③「女の人」、#9③「警官」、#10①「牽牛」の心内吐露が一回ずつある以外は、サザエの親戚の「ノリスケ」、カツオの友人の「なかじま」、マスオの同僚の「あなご」という、アニメ『サザエさん』のサブキャラクターにあたる人物までに限られていた。こうした心内吐露発話者の違いも昭和期と令和期のシナリオの構成の違いを現していると言えるだろう。

【表10 令和期における登場人物別でみる心内吐露】

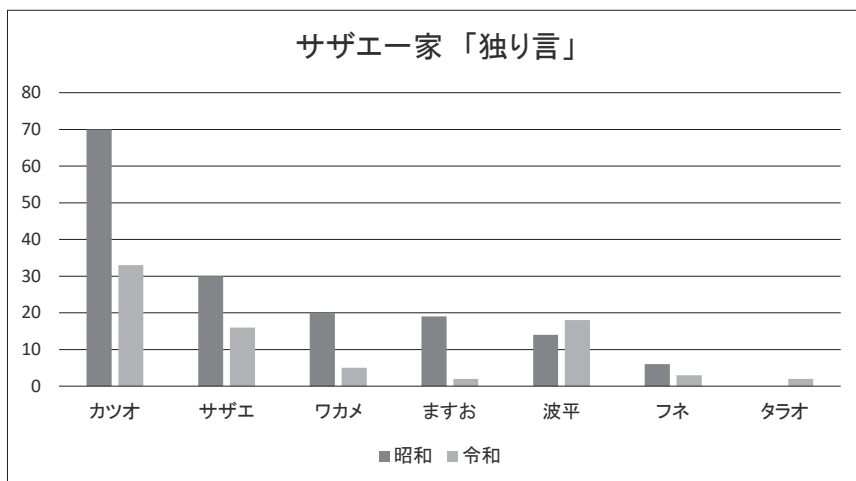
令和期	独り言	心内語
#1①	なかじま2回・タラオ1回	(心内語なし)
#1②	カツオ5回	波平1回
#1③	サザエ2回・カツオ1回	(心内語なし)
#2①	カツオ13回	カツオ4回
#2②	ノリスケ2回	サザエ1回・ノリスケ1回
#2③	カツオ2回・サザエ1回・波平1回	(心内語なし)
#3①	(独り言なし)	(心内語なし)
#3②	カツオ6回・波平1回	カツオ4回
#3③	(独り言なし)	マスオ3回・女の人1回
#4①	ワカメ3回	(心内語なし)
#4②	カツオ2回	(心内語なし)
#4③	サザエ2回・カツオ1回・マスオ1回	マスオ2回
#5①	サザエ2回	(心内語なし)
#5②	サザエ2回・カツオ1回	(心内語なし)
#5③	サザエ1回	(心内語なし)
#6①	カツオ1回	(心内語なし)
#6②	ノリスケ3回	ノリスケ4回
#6③	サザエ1回	(心内語なし)
#7①	ワカメ1回	(心内語なし)
#7②	(独り言なし)	カツオ1回

アニメの心内吐露表現における時代的变化

#7③	波平 2 回・サザエ 1 回	波平 9 回
#8①	タラオ 1 回	(心内語なし)
#8②	波平 1 回・カツオ 1 回	波平 2 回・サザエ 1 回・マスオ 1 回・あなご 1 回
#8③	波平 6 回	波平 7 回
#9①	(独り言なし)	(心内語なし)
#9②	フネ 2 回・マスオ 1 回	(心内語なし)
#9③	波平 1 回・フネ 1 回・牽牛 1 回	カツオ 1 回
#10①	波平 3 回・警官 1 回	波平 1 回
#10②	サザエ 3 回・カツオ 1 回・波平 1 回	サザエ 2 回
#10③	カツオ 1 回・ワカメ 1 回	カツオ 1 回

昭和期と令和期の表を比較して、独り言の出現回数が多かった昭和期では、独り言が無い回もあるものの、独り言が多い回では 6 人もの登場人物に独り言が割り当てられている。しかし令和期では多くても独り言は 3 人の登場人物までに限られていた。一方で、心内語においては昭和期は全体で 20 回と数も少なく、心内語を吐露する回も少ない上に、発話者も 2 人までであった。しかし令和期では #7③「波平 9 回」や #8③「波平 7 回」のように登場人物 1 人に心内語の発話が集中する回もあり、心内語をアニメの言語表現として積極的に用いていることが窺える。

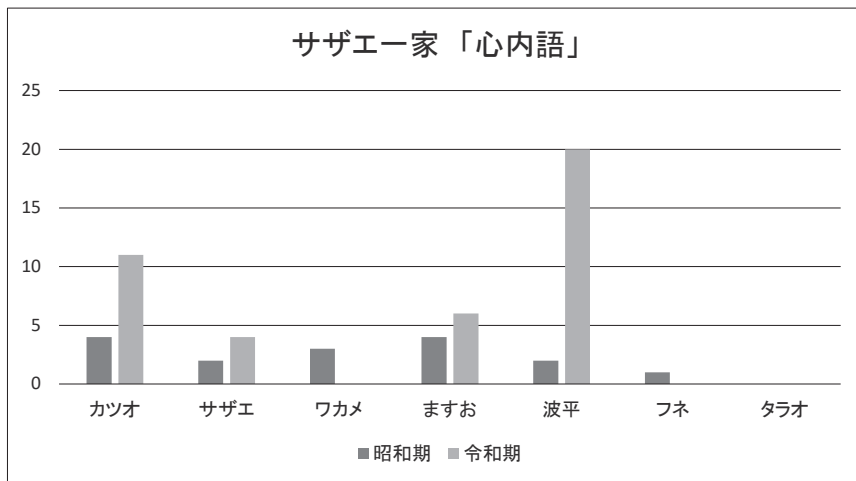
以上のように、独り言と心内語の出現傾向は昭和期と令和期で相違がみられるものの、サザエ一家を描くアニメの性質上から心内吐露の多くはサザエ一家の登場人物によることが確認できた。それを踏まえて、独り言と心内語の出現回数をサザエ一家のみで示すと、以下のようになる。



【図 1 サザエ一家「独り言」 昭和期・令和期】

独り言の数は昭和期ではカツオが突出して多いことが分かった。カツオは令和期での独り言は昭和期の半数以下に減少するものの、令和期でも独り言の数が最も多い。令和期ではカツオに次いで波平、サザエの順に独り言の出現回数が多い。

続いて、心内語では以下の結果となった。



【図2 サザエ一家の「心内語」 昭和期と令和期】

心内語の結果では、波平の令和期の数値が飛びぬけて高いが、分析対象となった令和期において「父の日のゆくえ」（2022年6月19日放送回）で波平の心内語が9回、「波平、思惑ハズレ」（2022年6月26日放送回）でも波平の心内語が7回あるため、その分が計上された結果である。いずれにおいても、令和期の心内語は波平とカツオが多いと言える。

以上の結果から、昭和期と令和期ともにサザエ一家のなかでは、独り言と心内語のどちらにおいても、カツオの心内吐露表現が多いことが分かった。心内吐露表現の数値から『サザエさん』の物語展開にとって、カツオの存在が重要であることが示唆されている。なぜなら、心内吐露をする登場人物は「物語の展開を起こす側」、もしくは「その展開に対して何らかの影響を受ける側」、または「展開を近くで見守る傍観者の側」のうちのどれかに位置するからである。カツオの心内吐露表現が多いのは、物語の展開に対する三つの立ち位置のどれかに位置することが、サザエ一家のなかで最も多いことを意味している。それは昭和期から令和期に至っても変わらないことも分析結果から明らかになった。

7. おわりに

本稿では、アニメ『サザエさん』を対象として、心内吐露表現の文体論的分析を行った。先行

研究で示された独り言の言語的条件は心内語に等しくあてはまった。昭和期に比べて令和期では、独り言は半数以下に減少し、心内語は半数以上に増加していた。その理由には、昭和期と令和期におけるアニメの構成そして作風の違いが関係していると考えられる。また、アニメに現れる心内語は発話の状況から①対面遠慮型、②周囲気遣い型、③独り思考型に分けることができるが、『サザエさん』においては「③独り思考型」心内語と独り言には明確な使い分けはされていないものと思われる。それは、独り言と「独り思考型」心内語には、作品上で大きな違いにはならないことが理由として考えられる。一方で、心内語の「対面遠慮型」と「周囲配慮型」には、どちらも現実の状況に即した心内語表現であるため、リアリティーが求められる作品においては、独り言ではなく、こうした心内語類型が用いられるものと推測される。非現実的事象による笑いに主眼を置いたギャグアニメ的作風であった昭和期では「対面遠慮型」心内語と「周囲配慮型」心内語が少ないことも、そのような理由からであると考えられる。また独り言の使用に関しては、シナリオ作成の分野においては、登場人物の心情を視聴者に説明するだけの拙い台詞であると考えられる側面があるが、昭和期に比べて半数以下に減ったものの、令和期においてもなお独り言が用いられているのは、『サザエさん』の視聴者層の広さが関係しているものと思われる。子供から大人まで幅広い年齢層を視聴者に持つ『サザエさん』は、作品の「分かりやすさ」が求められる。その「分かりやすさ」には作品の内容だけでなく、心内吐露表現の機能もまた、『サザエさん』に「分かりやすさ」を生む重要な役割を果たしているものと考えられる。

さらに、心内吐露をする登場人物は「物語の展開を起こす側」、もしくは「その展開に対して何らかの影響を受ける側」、または「展開を近くで見守る傍観者の側」のうちのどれかに位置していると言える。『サザエさん』においては、昭和期と令和期ともにカツオの心内吐露の数が最も多いことから、『サザエさん』の物語が展開する場面において、カツオの心内吐露表現が、心情、そして状況を分かりやすく伝える役割としての有用性があるとも言えるだろう。

注

- (1) 新井(1985)は独り言について「独白(傍白)」と表記している。越川(1976)は「独白」と「傍白」を区別しており、「独白」は「独り芝居」のように「ただひとりの話者が語る形式」を言い、「傍白」は「戯曲のなかで時や場所や人間関係など劇的な状況がすでに決まってい、その限定された状況のもとで登場人物がひとりだけのときにしゃべる台詞(p.190)」と定義付けている。本稿の「独り言」に関しては越川(1976)の「傍白」に準ずるものであると言える。
- (2) この「第四の壁を破る」という手法は、近年の日本のドラマにおいて、三谷幸喜・作『古畑任三郎』で主人公の警部補・古畑任三郎が事件の真相に触れる時などに突如、カメラ視線で視聴者に語りかけるという演出がなされている。

参考文献

- 新井一(1985)『新版 シナリオの基礎技術』ダヴィッド社
池上嘉彦(2007)『日本語と日本語論』筑摩書房

- 越川正三（1976）『文学と文体』創元社
- 長谷川町子（2020）『サザエさん 1』朝日新聞出版
- 長谷川葉子（2017）「三層モデルによる独り言の分析」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』開拓社
- 廣瀬幸生（2016）「主観性と言語使用の三層モデル」『ラネカーの（間）主観性とその展開』開拓社
- 藤田伸三（2018）『アニメ・シナリオライターへの道！』立東舎
- ブレヒト, ベルトルト（Brecht, Bertolt）（1996）『今日の世界は演劇によって再現できるかーブレヒト演劇論集ー』
（干田是也訳）白水社（原著は1962）
- 宮地裕（1980）「疑問表現」国語学会編『国語大辞典』東京堂出版
- 森山卓郎（1997）「『独り言』をめぐってー思考の言語と伝達の言語ー」『日本文法 体系と方法』ひつじ書房
- 依田義丸（2014）「シェイクスピアの独白」名古屋芸術大学研究紀要第35巻 pp.399-412